

『本草綱目』と林羅山

藍 正 字

は し が き

李時珍は中国明時代の偉大な医薬学家であり、かれの一生の業績には、博物学の巨著作としての『本草綱目』を完成したことがあげられる。中国古代の医薬学には、ひろい内容が蘊蓄されており、『本草綱目』に至るまで、古代本草学の新しい発展段階がしめされている。『本草綱目』は人類文化の貴重な遺産であり、その著者李時珍の名前は1951年に世界和平理事会のウイーン会議において、世界文化著名人の史冊に掲載されました。

『本草綱目』が出版されてから、20年たたないうちに、まず東隣の日本に伝えられた。当時、日本国は、江戸時代の初期であり、徳川將軍家が學術の振興を重視していたので、『本草綱目』がうまく伝播されることとなった。その時、『本草綱目』を最初に入手して、深く研究したのは、幕府の儒官、学者林羅山である。林羅山は日本の學術界に『本草綱目』を紹介して、日本本草学の発展を推進するため、『多識編』、『本草綱目序註』などの本を編著した。『多識編』の内容を読むと、『本草綱目』目録の漢名にもとづいて、和名で訓点して、時々注釈を付け加えている。『本草綱目序註』は『本草綱目』のいろいろな序文を注釈しており、これは『本草綱目』を勉強、研究する学者に多くの便利をあたえた。これらの本は簡要で、分かりやすく解説されていたので、日本における『本草綱目』がはやくひろく伝播した推進剤となった。日本江戸時代の本草学の発展、振興および有名な本草学家の學術思想と著書にとって、大きい影響をもたらすこととなった。

『本草綱目』と林羅山の『多識編』の繋がりを詳しく研究するため、わたくしは、寛永8年出版の『新刊多識編』再刊本と寛文12年出版の『校正本草綱目』の内容をつぎつぎに比較し検討した。これによって、『多識編』が『本草綱目』の内容を摘録した事実を証明した。そして、この事実を以て、科学巨頭李時珍とかれの大著作とを日本において熱心に伝播した江戸時代の学者林羅山先生を記念すべきことであると、わたくしは思います。

わたしはこれまでに臨床治療を行うと共に、『本草綱目』をとときどき検討したことがある。1992年来日してから、東洋史を少し読み、幸い山口大学東洋史学教室畑地正憲教授の下で、虚心に教えていただいた。先生は博古通今、漢学の高揚、中国古代史にも深い造詣

をもっておられ、わたくしにとって、良い勉強の機会になりました。この文章は畑地先生から審定していただいた。また、山口大学図書館、山口大学医学部図書館、宇部市図書館の皆様にも、古い資料を捜し、提供していただきました。心から感謝しています。

(一)『本草綱目』の伝日の始まり

『本草綱目』（以下、『綱目』と簡略す）という大著述が世に問われてから中国古代草学の発展は新しい段階にのぼった。李時珍の偉大な業績の成就には、医薬学の分野のみにかかわらず、植物学、動物学、鉱物学および化学など、いわゆる本草、名物、物産の学問、すなわち博物学の分野などすべてに不朽の業績がある。当時有名な学者王世禎は、『本草綱目』の序において、(『綱目』は) “実性理之精微、格物之通典、帝王之秘録、臣民之重宝也。”といわれた⁽¹⁾。日本の学者白井光太郎も、かれのはじめての『綱目』の全訳本『国訳頭注本草綱目』の序で、(『綱目』は) “為本草学上空前絶后の大著…伝来我邦、医家勿論、乃碩学鴻儒的参考書。林道春(羅山)、中村迪斎、貝原益軒、新井白石など研究不怠、就中对促使稻若水、松岡恕庵、小野蘭山、山本亡羊、などの名物物産家的輩出、増進国利民富給予了極大的動力。”といわれた。かれは、『綱目』は歴史の長い川の中の一顆明珠だと褒められた⁽²⁾。

『本草綱目』は初版してから、20年にたらないうちに、即ち17世紀前半期の明時代の万暦末年に大海をわたって、一番目に日本に伝えられた。当時、日本は江戸時代の初期で、将軍徳川家康は、医薬をとっても重視するだけでなく、自身でたくさんの薬を手作りした事がある。家康がなくなったとき、生前彼が居住していた駿府城に、たくさんの手作りの薬物と薬を作った器具とが残されていた⁽³⁾。徳川将軍家が重視するので、本草に関する学術は円滑に振興された。『本草綱目』は、当時海外文化輸入の窓口、日本と中国との通商港の長崎に届いてから、すぐ日本国内へ伝播されるようになった。徳川家康の侍講、学者林羅山(名忠、一名信勝、又名道春、字は子信、号羅山、1583-1657)は慶長12年(明万暦35年、1607)に、家康の命令をうけ、長崎の赴き、まず、『本草綱目』を一部入手した⁽⁴⁾。これは初版本の世の中にいわゆる“金陵本”と言われている。証拠は十分ではないが、上野益三のしらべによると、1603年出版した明版江西本の可能性がある⁽⁵⁾と言われているけれども、白井光太郎の検討によって、“金陵本”とされている。従来、この白井の説を定説としている。又『新刊多識編・解説』⁽⁶⁾によると、初版した『綱目』(金陵本)は明時代の万暦18年(1590)で、(また医学史界学者は『本草綱目』の初版金陵

本が1593年などであることを認める)再刊本の江西本は万暦31年(1603)であり、江西本と慶長12年(1607)に羅山が入手した『本草綱目』の間に4年しかなく、遠い海を隔て、その時、交通が不便利であり、この間の舶載記録が見出せない状況から、羅山がはじめて入手した『綱目』は金陵本と認められるべきである。

わたくしは『新刊多識編』をしらべているうちに、『綱目』の草部第14巻草之三芳草類の“荏草”および果部第31巻果之三夷果類の“没離梨”は『多識編』に載せられていないことをみつけた。“荏草”は白蘇といい、『別録』の上品に組み込まれ、“没離梨”は『證類本草』の木部の下品にあり、この二つの薬が時珍原本から脱漏されており、後世の医学家が江西版『本草綱目』にしたがつて補充したものである。これにより、羅山は『多識編』を編纂している時には、時珍原本を底本としていたと見るべきだと思います。また『本草学論考・日本本草学的沿革』において、白井光太郎は、現在日本内閣文庫に保存されている金陵版『本草綱目』について、その本に、曲直瀬玄朔(字道三、号東井、1549-1631)の書いた識語が書き込まれているといわれた⁽⁷⁾ そうだ。また上野益三の『日本博物学史』によると、曲直瀬玄朔はその師曲直瀬道三(名正慶、字一溪、1507-1594)が天正8年(1580)に出版した『能毒』を増訂するとき、日本に伝わったばかりの『本草綱目』を参考にして、『薬性能毒』一卷を書くことができた。その本の中に、“近『本草綱目』来朝、予閱之、摘至要之語、又加之新添薬品。”という記録がある⁽⁸⁾。『薬性能毒』は1608年に出版したものである。玄朔が『薬性能毒』を編纂するときには、参考にした『本草綱目』と現在内閣文庫が保存している金陵本『本草綱目』と同じ本だと考えるべきであり、その本を玄朔が入手した時期はすくなくとも1608年の前である。だから、その版本と林道春が1607年に入手した『綱目』とは皆な同一時に長崎へ届けられ、日本に輸入された可能性があると思う。羅山はこの本を入手してから、すぐに徳川家康へささげた。また、この本を原典として、『多識編』を編纂したのである。そのほか、『本草綱目序注』、『本草序例注』などを書く時にも、この本を参考にした可能性があった。家康はこの本を座右に置いており、近藤正斎の『右文故事』によると、“『本草綱目』明版40冊、称神君御前本、即御手沢本也。”⁽⁹⁾と記録されている。1608年、林道春は駿府に赴き、御書庫の管理役となり、家康の左右にあって、毎日毎日、『論語三略』を講読して、また、医官と医薬の事を研究している⁽¹⁰⁾。家康は医薬が大好きであったので、林羅山に『本草綱目』を解釈させたことも見込まれる。

(二) 林羅山の『多識編』およびその影響

林羅山は医学を専攻としている人間ではないが、早年に大儒藤原惺窩から程朱儒学を習い、後、徳川家康になさけ深く持て成されて、江戸幕府の儒官になった。著書は190部あまりがあり、“開天下万世儒宗之基、対国初創業議事無所不聞”⁽¹¹⁾といわれた。かれは一番目に『本草綱目』を導入して、日本本草学が発展することによって、承先啓後の作用をはたしている。杉本つとむによると、日本の本草学は大きく三つの時期をわけることができる⁽¹²⁾。即ち、唐時代の『新修本草』をはじめて研究する平安時代を第一時代として、この時代に、深根輔仁の『本草和名』は研究成果としての代表作品である。宋時代の『証類本草』をはじめて研究する鎌倉、室町時代を第二時代として、惟宗具俊の『本草色葉抄』は研究成果としての代表作品であり、明時代の李時珍の『本草綱目』をはじめて研究する江戸時代を第三時代として、研究成果としての代表作品は『多識編』である。林羅山は第三時代の先駆であり、『多識編』の著者である。この本を『本草綱目』を研究する専門書とすれば、貝原益軒の『大和本草』と小野蘭山の『本草綱目啓蒙』と比べて、本の全体内容から見ると、一定の距離があることを認められる方もいるが、純粋な本草学としては、『綱目』を紹介する入門工具の本としている。川瀬一馬博士によると⁽¹³⁾、『多識編』は林道春が『本草綱目』から摘出して、和訓を加えて、編纂した本草類であり、簡易な和訓辞書であり、平安時代醍醐天皇の侍医深根輔仁が延喜18年(918)に唐代『新修本草』から摘出して編成した『本草和名』(18巻)の体裁を真似て編集したものであるという。『本草綱目』を検討するために読者に便利を与えたものである。また、『羅山先生文集』(1630年版)巻55の『多識編』跋文によると、“壬子之歳(1612)拔写『本草綱目』面附以国訓鳥獸草木之名、不在茲乎因以命名。”と林道春が書いている。しかし『多識編』を編纂して、『本草綱目』のよりどころとしただけではない。その本の内容をみると、ほとんど『綱目』から出ており、それは日本に本草学研究を進めることに、おもな役割をはたすだけでなく、金石、草木、禽獸など漢名を集めて和訓を注入しているので、後学者が漢詩文を作ることに良い資料も与えた。だから、辞書史と文化史にとって、すべて一定の価値をもっている。

日本の江戸時代における本草学に対する研究は、『多識編』にもとづく。輸入した『本草綱目』を翻刻して、和刻本をはじめて刻したのは、明時代の崇禎10年、即ち日本寛永14年(1637)に京都魚屋町通信濃町に、野田弥次右衛門という書肆で発刊されたものであった。これは万曆癸卯(1603)に出版した江西本『本草綱目』を底本として翻刻している。

それに訓点した人はよくわからないが、本の諸品の和名はだいたい『多識編』の和名にもとづくので、白井光太郎は林道春だとみとめている⁽¹⁴⁾。そのあと、貝原益軒（名篤信、字子誠、号益軒、久兵衛を俗称し、1630-1714）と稲生若水（名宣義、字彰信、号若水、1667-1715）とが研究してから、小野蘭山（姓佐伯、小野氏、名職博、字以文、号蘭山、1733-1810）の『本草綱目啓蒙』にかけて、本草学はすばらしく発達するようになった。蘭山の『本草綱目啓蒙』は『本草綱目』を研究した最高峰の成果である。

『多識編』は、『本草綱目』を研究することと本草の著書の和名訓点にたいして、重要な役割をはたしたことが以下の事実から説明できる。

即ち、寛文12年（1672）に出版された和刻本『本草綱目』には、貝原益軒が訓点して、世の中で益軒本と称し、また『校正本草綱目』といわれる。その本の毎冊の後には、白井光太郎によって“和漢名対訳表”といわれた『本草和名』という標題語がある。じつは、すべて『多識編』からそのまま摘出して、『綱目』の原本を参考にしたのではない。たとえば、『多識編』の土部第4では『綱目』の第7巻土部の“天子藉田三推犁下土”の“三”字（時珍曰：“月令、天子以元旦祈谷于上帝、親載耒耜、率三公、九卿、諸侯、大夫躬耕、天子三推、三公五推…”）を“土”字にまちがい、伏竜肝の“肝”字を“肺”字に間違っている。そこで『校正本草綱目』のあとに付いた和漢名対訳、即ち『本草和名』も『多識編』にしたがって、“天子藉田土推犁下土”と“伏竜肺”と同じ間違っている。そのほかにも、同じ間違いの所がある。これによると、『校正本草綱目』の編集者は和漢名対訳をくわえるとき、『多識編』だけを参考としていたことを知ることができる。又、貝原篤信は『本草綱目品目』を輯録して、和名を付したとき、ほとんどすべて『多識編』に拠っている。こういうことは小野蘭山の『本草綱目啓蒙』にもある。だから、『多識編』が出版されたことは、本草学の和名を考定し、日本に本草学をうまく発展させたことに、重要な役割をはたしていることは否認のできない事実である。

（三）『多識編』と『本草綱目』との緊密な繋がり

次に、『多識編』の詳しい内容を『綱目』と比較してみよう。林道春は『多識編』を編纂しているとき、参考にした底本が『本草綱目』だけではなかったのもので、『多識編』の内容は以下の三つの分野に分けることができる。

第一、『本草綱目』を底本としている部分である。これと早大本＝寛永8年に出版した『新刊多識編』づけ早大本、和泉屋版『本草和名』の版本及び『校正本草綱目』の内容と

をくらべてみる。

『多識編』のおのおの薬物名の標題語、すなわち行ごとに一番上（縦のけい）の薬物漢語名は『綱目』の“正名”と対応し、黒い底に白い字で表記する“異名”（『古活字版多識編』には“異名”という“標題語”がない）⁽¹⁵⁾ および行の中に書かれる薬物の漢語名の大部分は『綱目』の“釈名”と“集解”から出るが、『綱目』の“附方”と“附録”から摘出したのも少なくないのである。たとえば、卷之2 毒草部第四の“蝨建草”は『綱目』第17卷牛扁の“附方”から摘出しており、“透山根”は海芋の“附録”から摘出したこと明らかである。これにより、林道春は『綱目』の全体を深く研究していたことがわかる。

『多識編』卷之1、卷乃2、卷之3、卷之4すべてと卷之5の人部第二とは皆『綱目』を底本としており、凡そ『綱目』の目録の条目を『多識編』は薬物の漢語名として、各行の一番上部に配列している。『綱目』卷之5の水部から始めて、その中に、“諸水有毒”の条目は『多識編』の中にはないけれども、『綱目』本文には、その条目の下の“水府竜宮”、“陰地流泉”、“銅器上汗”など10種類については『多識編』の行の中に配列されている。（即ち每行の一番上をしめない）。『綱目』火部卷6、土部卷7、金石類卷8、石部卷9、10、11の中には、“越砥石と“蛇黄”としかない。そのほかは全部『多識編』に載せられている。草部は12巻から21巻まで『綱目』本文には14巻の“荏草”だけがないので、そのほかについては『多識編』にすべて載せられている。谷部22巻から25巻まで、第25巻造醸類の“榆仁醬”と“蕪夷醬”との2つだけが載せられていない。菜部は26巻から28巻まですべてについて載せられている。果部は29巻から33巻までには、夷果類の“没離梨”と瓜類の“西瓜、葡萄”および水果類の“紅白蓮花”の4つの条目が載せられていない。木部は34巻から37巻までには、寓木類の“柳寄生”と苞木類の“竹、天竺黄、仙人杖、鬼齒”および雑木類の“震燒木”の6つの条目が載せられていない。服器部第38巻、虫部第39巻から42巻まで、鱗部第43、44巻および介部第45、46巻はすべてのものが『多識編』に載せられている。禽部には47巻から49巻まで、“諸鳥有毒”だけが載せられていない。獸部には50巻の“諸血有毒、諸朽骨、諸肉有毒、解読肉毒”の4つの条目および51巻の“土撥鼠”が載せられていない。人部第52巻には人之一すべてで35条目であり、“方民、人傀”のほかに全部載せられている。

ところが、『綱目』の“釈名”には、ある薬の異名として、幾つかある場合でも、羅山はその一部分だけをとって、『多識編』に異名として表記している。それに加えて『綱

目』の毎巻のあとの“附録”の中にいろいろな条目があつた場合でも、選択にちがいがあつた。例えば、草部のあとの附録の“諸藤”は19種類であるが、“竜午藤、牛乃藤、牛額藤、鬼膊藤”だけを摘出し、果部のあとの附録の“諸果”は23種類であるが、“人面子”だけをとり、木部のあとの附録の19種類はすべて載せられていない。さらに、虫部のあとの附録の7種類については、5種類が摘録されており、鱗部のあとの附録の9種類の中で8種類が摘録され、“魚子”だけが載せられていない。又“鯨”と“土肉”を増して、そして“(鯨)日本海畔处处取食、其脂甚臭腥、民代為灯油…”と“(土肉)蓋我邦海鼠者耶、『本草綱目』所載海燕亦雖形相似而是別一種也、『綱目』封下亦載土肉也。”という案文が加えられている。これによって、林道春は『多識編』を編纂しているうちに、『本草綱目』のすべての条目を詳しく検討することで、決してそのまま抄録してはいない。要するに、『綱目』毎巻のあとの附録の諸条目については、植物の部分は多く捨てられ、動物の部分が多く載られている。取るか捨てるか、どういうふうを考えていたかについては、これは後究を要するところである。

第2、何を底本としているか、不明の部分がある。『多識編』巻之5の人部第1の内容をみると、人体の頭、面、軀干、四肢を名付けることについては、どの本から摘録したか、詳しく検討する必要がある。

第3、『多識編』巻之5の田制門第3から、麻苧門第21までについては、元代の王禎の『農書』を底本としており、『多識編』の15パーセントぐらいを占めている。

要するに、『多識編』の内容の大部分は『本草綱目』に基づいており、それは日本で一番早く『綱目』を研究した著作である。『綱目』の目録の見出し語を摘録することをはじめ、和訓をつけ、ときどき解釈を加えて、また『綱目』の分類法を受けついでいる。すなわち薬品分類の分野には、“草石不分、虫獸不弁”の状態を正しているが、それは『綱目』の自然分類法にしたがっており、鉱物を分けて、水、火、土、金、玉になっており、植物を分けて、草、谷、菜、果、木、竹、服器など27部になっている。部については、漢名を配列している。その新しい分類法は近世の西洋博物学の分類法と比翼することができる。『多識編』を刊行したことは、日本江戸時代の各本草巨頭の学術思想および『本草綱目』を研究する著作に大きいな影響を与えた。

(四) 林羅山の『本草綱目』に拠るほかの著書

『多識編』を編纂するほかに、羅山は『本草綱目』の巻帙があまり多く、広く研究をす

すめるためには、あまり易しくはないと認識したので、『綱目』巻頭万曆庚寅の王世禎の序と『重刊本草綱目』の夏良心の序と張思鼎などの序の難しい言葉を解釈、訓点して、『本草綱目序註』を書き、1657年に、上、中、下3巻を完成し、京都2条通鶴屋町田原仁左衛門の刻版で出版した。この本も『綱目』を紹介し、研究する入門工具書である。総論から『綱目』を知りたがる読者に、非常な便利を与えた。『綱目』が日本で伝布する上で、よい仲介の役割をはたした。

(五) 結 語

林羅山は『綱目』との関係において、また、かれは『綱目』を大切にし、きちんと保存している。史料によると、元和2年丙辰(1616)に徳川家康が病歿し、林道春は駿府に赴き、駿府御文庫に家康の遺愛の書籍を取り集めた。御文庫本中に“日本の旧記と希世の古本が江戸御文庫(紅葉山文庫)に納められる。”⁽¹⁶⁾とある。その中に、慶長19年(1614)に江戸に持ち込んだ『本草綱目』がある⁽¹⁷⁾。

江戸時代幕府官学の総帥としての林羅山は、医学に深い興味があったので『本草綱目』と良縁を結んだ。かれは長崎から『本草綱目』を導入して、日本本草学の盛んな端緒を開いた。林羅山は医学の発達を重視して、庸医を鄙薄した。いわゆる“世之不知杜衡、細辛而欲療疾焉、不弁蹲鴟之為芋為羊而欲誦医書焉。”⁽¹⁸⁾という識語は『本草綱目』をよく研究していたから、李時珍の言葉を以て、庸医が人命を草芥とすることを厳しく批判したものである。かれにそなわる気品が、人々をして深く尊敬せしめることとなった。

林羅山の後、『本草綱目』の金陵本、杭州本などが次々に中国大陸から、唐船貿易を通じて、日本に届けられている。その中に、元禄元年(1688)一年だけでも、中国の福建、廣州、江蘇などから派遣された唐船は193艘もある⁽¹⁹⁾。宝永3年(1706)、宝永7年(1710)、享保4年(1719)、享保10年(1725)、享保20年(1735)、享和3年(1803)、文化元年(1804)、天宝13年(1842)、安政5年(1858)、安政6年(1859)など、中国南京と廣州などの場所からの“唐船”によって『本草綱目』がもたらされている⁽²⁰⁾。1719年の南京船は、一回だけで5部を持って来ており、同時に『本草会纂』5巻などのほかの大量な医薬書籍も唐船によって運んできている。江戸時代の中日交易史料上に『本草綱目』などの舶載書目の明確な記録を確認することができる。

江戸時代の後、日本国は明治維新の近代化の波の中で、ドイツなど西洋医学輸入と医学教育の採用とに伴い、また当時政府が漢医禁止の法令をたてたので、漢方医薬学の存在は

社会的基盤を失ってしまい、一時的に衰退するようになった。しかし、日本の漢方医界には、先覚者も少ない。たとえば、和田啓十郎などの先輩は、漢方医薬の冬眠現状に直面していながら、立ち上がって、漢方医薬学の復興を呼び掛けて、1910年には『医界之鉄椎』を書き、弊風を批判して、漢方薬の臨床価値を強く認めた。有名な日本医薬学者達も漢方薬の薬理作用をはじめて研究するようになっている。現在、西洋薬の副作用がますます増えているので、一部分の病気の治療において、漢方薬を使用することが見直され、ブームとなっている。『本草綱目』を研究する先生方も増えている。たとえば、いま日本漢方の臨床大家寺師睦宗先生は自ら何十年にも及ぶ臨床経験により、『綱目』から日常使用にも効果的な108種類の生薬を選択して、『綱目』の“気味”、“主治”、“発明”の原文を摘録して、『臨床百味、本草綱目』を編著して、1992年に“漢方三考塾”の教科書として出版した⁽²¹⁾。東京医薬専門学校の前本守正先生は、1991年12月に香港を訪問したときに、李時珍が『本草綱目』を編纂している画像にも表敬訪問をした⁽²²⁾。かれらも林羅山のように、『本草綱目』を現代の日本の読者に紹介することに大きな役割をはたしている。

注 釈

- (1) 李時珍『本草綱目・序』。北京人民衛生出版社校点本、1977年。
- (2) 白井光太郎『頭注国訳本草綱目・序』、2～3ページ。1931年東京春陽堂で出版した。精装本12冊。
- (3) 服部敏良『江戸時代医学史の研究』、663、664ページ。吉川弘文館刊行、昭和53年（1978）第一次印刷。
- (4) 白井光太郎『支那及日本本草学の沿革及本草家の伝記』41ページ。岩波書店、昭和5年（1930）4月10日印刷。
- (5) 上野益三『日本博物学史』、204ページ、東京平凡社、1973年。
- (6) B・H日本語研究グループ『早大本寛永8年版 新刊多識編』解説、4ページ。
- (7) 白井光太郎『本草学論考・日本本草学の沿革』、31ページ。岩波書店。
- (8) 上野益三『日本博物学史』、247ページ。
- (9) 市島謙吉編輯『近藤正斎全集・第二』「右文故事巻之四」、179ページ。東京活版株式会社明治39年3月20日印刷。
- (10) 上野益三『日本博物学史』、247ページ。
- (11) 白井光太郎『本草学論考』、41ページ。

- (12) B・H日本語研究グループ『早大本寛永8年版 新刊多識編』解説、4ページ。
- (13) 同上、1ページ。川瀬一馬「かがみ」第4号 大東急記念文庫昭和35年10月「多識編について」
- (14) 白井光太郎『本草学論考』、392ページ。
- (15) B・H日本語研究グループ『早大本寛永8年版 新刊多識編』解説、4ページ。
- (16) 市島謙吉編輯『近藤正斎全集・第二』「右文故事卷之10」、265ページ。
- (17) 上野益三『日本博物学史』、251ページ。
- (18) 『羅山先生文集』50巻「脈訣刊語序」。
- (19) 大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』10ページ。京都大宝印刷株式会社、1967年。
- (20) 同上
- (21) 『漢方研究』、33ページ、1992年7月。
- (22) 『漢方研究』、32ページ、1992年2月。